

NPO法人

森を再生する会 会報

第37号

2023年 5月1日
NPO法人 森を再生する会

水源の森を守ろう！ 取り戻そう！

— 目 次 —

・法人設立20周年を迎えて	1 P	・随想 森が教えてくれること	4 P
・理事長退任にあたって	2 P	・特別寄稿 吉野知明氏	6 P
・NPO森を再生する会のあゆみ	2 P	・令和5年度活動予定	8 P
・新城市作手高里 林分調査報告	2 P	・寄付のお礼 等	8 P

法人設立20周年を迎えて

汐満健一

1年前に大役を引き継ぐことになりました。前理事長は本会以外にも NPO エコネット あんじょうの理事長を長年勤めてこられ、安城市の環境問題への取り組みを大きく前進させてきた方です。そのような方の後任ということで、忸怩たる思いを禁じませんが、私にリーダーシップがない分、会員の皆様と相談しながら、「聴く力」でもって本会の運営に取り組んでまいりますのでよろしくお願いいたします。

さて、本会は令和5年度に法人設立20周年を迎えます。これまでの歩みは次ページに簡単にまとめましたので興味のある方はご覧ください。今年度は20周年らしい取り組みをしようと思い、毎年恒例の自然観察会の会場に、本会が初期に間伐・植樹活動に取り組んできた設楽町田峰地区を選びました。田峰地区の活動を終えて10年以上が過ぎ、植生がどのように変わっているか、うまくいっていない面も含めて観ていきます。また、過去の実績を調べてみると安城市内外各所で植樹活動をしてきましたが、その後の様子を調べて回るのも楽しいかなと思っています。

会員の皆様と楽しみながら活動していきたいと思っておりますので、どうか会員各位のご協力をよろしくお願い申し上げます。

理事長退任にあたって

神谷輝幸

2003.12.3特定非営利活動法人森を再生する会発足以来、20年間という長きにわたって理事長を務めさせていただきましたが、交通事故にあってから、最近では体力の衰えを覚えるようになり、毎回山作業に参加し、陣頭指揮ができにくくなりました。突然身を引くような事態になることを考えると、理事長を交代するのは今しかないとの思いが募ってきました。

幸い、新しく汐満健一理事長のもとに令和4年度も予定通り事業も終了し、スムーズに移行できたことを嬉しく思っています。

私もまだ少しの体力は温存しておりますので、体力が続く限りは、新理事長をバックアップし、お手伝いを継続するつもりであります。

特に記念誌の発行が延び延びになっていきますので、20周年記念誌としてこれまでの取り組みをまとめたいと思います。

これまで、会員の皆さんには多大のご支援ご協力をいただきましたこと厚く感謝申し上げます。

NPO森を再生する会のあゆみ

平成11年	設楽町田峰地区で間伐・植樹活動開始
平成12年	安城市民会議環境委員会にて「市民の森づくり」提案
平成14年4月12日	森を再生する会設立
平成15年8月29日	NPO森を再生する会設立総会
平成15年12月3日	NPO法人設立認証
平成19年	設楽町田峰地区に流域住民を結ぶ交流施設「方丈庵」建設
平成19年10月14日	開田高原安城学園高校所有地で植樹祭
平成20年3月16日	安城学園高校第2グラウンドで植樹祭
平成21年3月8日	安城市赤松町半場川堤防（デンパーク西側）で植樹祭
平成21年9月	新城市作手高里で間伐・植樹活動開始
平成23年3月6日	安城市赤松町半場川堤防（デンパーク西側）で植樹祭
平成23年7月	設楽町納庫地区で間伐・植樹・巻き枯らし間伐活動開始
平成23年10月9日	東浦町シーダーハウスで植樹祭

新城市作手高里 林分調査報告(要約)

新城市作手高里の森林において平成21年から間伐・植樹活動に取り組んできましたが、数年活動をした後は活動場所を設楽町納庫の森林に変え、その後7年間放置してお

りました。その間に、植樹した苗木のほとんどは残念なことに鹿に食い荒らされ、枯れてしまいました。また、間伐場所は笹に覆われてしまいました。一昨年からの作手での活動を再開しましたが、笹を刈る作業から始めなければなりません。

今回の報告は、会員の杉浦博久氏による未間伐の林の現況調査結果です。

1. 調査日 令和4年7月31日
2. 樹種名 檜
3. 森林の現状
 - イ 枯れ木:少ない
 - ロ 林床の植生:植樹中でまだ少ない
 - ハ 樹冠の閉鎖度:75%
4. 地形
 - イ 斜面の傾斜度:北向き
 - ロ 傾斜角度:約20度平均
5. 現況まとめ

調査対象の人工林管理はやや良好と思われる。一部だが枝払いされている。過去に間伐したことがうかがえる。日が差し込む状況があり、笹が生えている箇所がある。

今回の調査は2か所行ったが、相対幹距比(混み具合)は一方が過密、もう一方が著しく過密であり、どちらも荒廃状態の判定である。

6. 今後とるべき対策

宮脇方式森づくりの方向(注1)で、伊勢神宮方式(注2)で森林管理する。

- ① 3割間伐を実施する。そのために檜直径23cm以下を伐採する。
- ② 今後残す木に、大樹候補木と副大樹候補木を選定する。
- ③ 受光伐を行う。大樹候補木に太陽光が当たり、植樹した木には4時間の日照を目指す。

(注1) 宮脇方式森づくり「今すすめるべきは土地本来の森づくり」

(「三本の植樹から森は生まれる」宮脇守 祥伝社刊)

- ① 土地本来の木を植えよう。
- ② 混ぜる。混ぜる。1種類だけの木を植えない。
- ③ 植樹から3年は除草の管理、あとは自然の力
- ④ 自分の手で木を植える。
- ⑤ 子供たちにいのちの大切さを教える。

(注2) 伊勢神宮方式

(「随想 遷宮の御用材を育てる神宮宮城林」金田憲明)

- ① 大樹候補木を選定をする。この時、次に成長が期待できる副大樹候補木も



円周から直径を測ります。

選定する。

- ② 受光伐をする。枝先が触れ合う隣接木を伐採し、1.5倍程度肥大成長させる。
- ③ 針広混交林にする。多めの間伐を繰り返していく。
- ④ 長伐期で行う。樹齢200年程度まで間伐を繰り返し、「ひのきの人工林」の1ヘクタール当たりの存立本数は100本程度、大樹候補木の胸高直径は100cm以上をめざす。

随想 森が教えてくれること

神谷輝幸

自然栽培成功の秘訣

今、私の癒しの空間は畑です。畑や庭のプランターを眺めていると、そこは私のパラダイスです。耕さず、農薬は使用せず、肥料も与えず、草も敵にしない。微生物と友達になるような自然菜園づくりを楽しんでいます。

人間がやることはすべて不完全ですが、人間がやることを最小限にすることにより、植物は、太陽、CO₂、水、微生物が絶妙なハーモニーの中で完全な作物を私たちに与えてくれます。我が家の食卓には安全な野菜たちが顔を揃えています。手抜き農業とも言える方法で、自然は恵みを与えてくれます。

その極意を仲間と共に検証をする畑仕事もしています。それもまた楽しい時空です。

原生的な森は、人間の手が入ってなくても完全です。人間が手を入れないからこそ、自然の秩序が保たれて、樹木がその命を全うする森が出来上がっています。

原生的な森は人間が耕したり、肥料を与えたり、消毒など何もしないのに立派に大木に育っています。不思議だな、と思います。無農薬でリンゴ栽培に成功した木村秋則さんも森からそのヒントを得ています。

「畑を森のようにしたい！」それが私の今のテーマです。畑を人間の力で壊さないようにしたい。その方法が不耕起栽培です。土中の微生物を殺さないように働きやすい環境を保ちたい。だから農薬は絶対に使用しません。肥料は、作物と微生物が協力し合って必要で十分な養分を自ら作ります。微生物や作物はウイン・ウインの関係で互いに助け合っています。人間は、微生物が住みやすい畑にするだけでいいのです。

そういう畑からできる作物は、ビタミン、ミネラル豊富で抗酸化力の高い作物で、私たちの健康な体を作ってくれます。医食同源です。里芋、ジャガイモ、ニンジン、ショウガ、ナス、ピーマン、ゴーヤ、キュウリ、サツマイモ、ケール、ネギ、たまねぎ、カボチャ……。ゴールデンウィークにかけてこれから忙しくなります。一日の作業を終えて西の空に夕陽を見る時、ミレーの晩鐘の風景が浮かんできます。

森はCO₂の貯留庫です。

森林は、樹木の葉っぱで空気中のCO₂を炭酸同化作用で吸収し酸素を放出してくれま

す。地球温暖化が叫ばれる今、この森林の働きは、とても重要です。

植物が吸収したCO₂は、からだづくりに使われ、木は大きく成長します。もう少し説明すると、セルロースやリグニンという形で樹木に蓄えられます。また、でんぷんや糖に変わり、根っ子に送られます。根っこには菌根菌が共生しており、エサとして受け取ります。そのお礼として菌根菌は、アミノ酸を作り根っこに渡します。つまり肥料をやらなくても植物は、菌根菌から窒素肥料を受け取っているのです。このような仕組みで空気中のCO₂は、樹木や土壌の中に蓄えられてきました。(吉田太郎著 土が変わればお腹も変わるより)

ところが、人類は、開発と称して、森林を伐採し、農地に転換し、耕すことにより、土壌中のCO₂がどんどん放出されています。

地球温暖化の原因は、石油・石炭の使い過ぎにあるという主張ばかりが大きいのですが、それに匹敵するほど森の消失が大きな原因であることがわかってきました。森を再生することの重要性が今、見直されています。森を再生すること、再生農業へ転換できれば、地球温暖化はストップできるといいます。

2050年までにカーボンニュートラルを実現しなければ、地球温暖化がブレーキの利かない状態になり、それ以降の努力は無効となり、温暖化は暴走し人間が住めない地球になるというのが科学者の警告です。

2050年 カーボンニュートラルの実現は可能！

2050年カーボンニュートラル達成は、全世界に向けて発信された国連からのメッセージです。厳しい目標値ですが、達成可能な道筋も示されています。その一つは森の再生です。もう一つは、現代農業を再生農業に切り替えることです。農地が、巨大なCO₂の貯留能力を持っていることが分かったからです。しかし、今までの農法は大地を耕すことにより貯留されていたCO₂を空中に放出させてきました。耕すことをやめ、農薬・化学肥料を使わない再生農業へ切り替えることにより毎年0.4%ずつ農地にCO₂を貯留できれば、2050年までにカーボンニュートラルは、達成が十分可能だといいます。この取り組みは4パーミルイニシアティブと呼ばれています。

実現のカギは、国民全体の決意があるかどうかにかかっています。

自然の回復へ

地球温暖化が危機的状況にあります。その原因は、石油・石炭を使い過ぎただけではなく、森を壊し、農地を荒廃させた人間の営みもそれ以上の大きな原因となっていることがわかってきました。その解決策は、産業革命以来行ってきた人間の活動スタイルを改めることです。すなわち、森を再生すること、農業を現代の大型機械化農業、化学的農業から小規模な自然再生農業へと転換することです。欧米でもこの動きは広がりを見せています。

こうした方法は、私たち一人一人でも出来ることです。庭に一本木を植えること、落ち葉を掃いて庭の片隅で堆肥化して作物を育てること、生ごみをゴミとして出すことをや

め、堆肥化して土に返すこと、プランターで化学肥料や農薬を使わない自然栽培でハウレンソウを作って健康野菜を楽しむことなど、お金を使わず、毎日楽しい暮らしができます。

こうした小さな活動をしながら、一人一人が、今、失われている自然を楽しくむ心を持つことが、一番大切だと思っています。

特別寄稿 2023年 森を再生する会への期待

森を再生する会の発足以来、会の活動をサポートし続けてくださったエスバックミック株式会社の吉野知明氏が代表取締役社長に就任されました。社長就任を機に寄稿文をお寄せいただきましたので紹介します。

森を再生する会の皆様、こんにちは。エスバックミック株式会社の吉野です。この度は、寄稿の機会をいただき、ありがとうございます。

森を再生する会とエスバックミック株式会社のつながりは2004年の設楽町田峯地区での植樹をお手伝いさせていたのがきっかけです。その後、2007年には田峯地区の植生調査、2011年～2020年には設楽町納庫地区での巻枯らし間伐の実践やモニタリング調査、2021年からは作手での里山づくりと20年にわたり水源林や里山林の実態調査や植樹事業をお手伝いさせていただきました。この間、41種、約11000本もの広葉樹を植林してきました。私自身は、入社2年目であった2006年から今日にいたるまで、会の皆様とともに森づくり活動の実践を積み重ねることができました。長年の森づくりの現場は駆け出し社員であった未熟な私に多くの学びの機会を与えてくれました。改めて皆さまに感謝いたします。

エスバックミック株式会社は創業以来、横浜国立大学名誉教授宮脇昭先生の潜在自然植生に基づく森づくりに取り組んできました。潜在自然植生とは人の手が一切加わらなかったときに成立する最も安定した自然植生、例えるなら人の手が入らない禁足地のような鎮守の森や奥地の原生林のことを示します。都市域における潜在自然植生は、ほとんど失われてしまっていますが、最も安定して長持ちする生態系であり、火事や地震、自然災害においても自然の回復力を活かして耐えることができるものといえます。植栽技法は生態系(自然の掟)、伝統農法、林業の知識が応用されたものであり、通気性、排水性の良い基盤を作り、その土地に見合った樹木を混植、密植する手法で早期の樹林化が可能です。この森づくり手法は、1970年代の高度成長時代の日本において原型が考案されました。自然環境にとって逆風ともいえる経済優先の時代であったにも関わらず、宮脇昭先生の徹底した現場主義、強い問題意識、トップに直接働きかけるリーダーシップにより日本各地で行政、企業、市民団体とともに森づくりが実践されてきました。

そのような時代において、エスバックミック株式会社は宮脇昭先生の提唱する学術理念と現場をつなげる役目として、種苗育成や植栽計画、イベントの補助を手掛けてきました。森を再生する会様との出会いもそのような時代背景の中から生まれて

きました。残念ながら宮脇先生は2021年7月に逝去されましたが、徹底した自然観察眼、目に見えるものだけでなくその背景を読み解く洞察力、植生再生に当たりわかりやすい説明、すべて自然に帰る有機物マルチング、リーダーシップの重要性など、植生再生技術だけにとどまらず、人の在り方そのものについて、私たちに指導されてこられました。森づくり事業に携わってきたものとして、先生方や現場、自然や実践の中から得た多くの学びを継承し、次の世代につなげていきたいと考えております。

2015年9月には国連サミットで持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)が採択され、2022年12月には生物多様性に関する世界目標として昆明・モンリオール生物多様性枠組みが採択されました。私たちの生活において自然資源をどのように継続的に利用していくか、その恵みを将来得るためにどのような活動が必要か、失われた生き物のつながりをどのように回復させていくか。そのような取り組みが世界規模で求められる時代となりました。森を再生する会様の活動は、水源の森や里山という自然資本を維持するために必要な活動です。そして、社会的に求められている活動であり、同時に今、本当に危機に瀕している課題でもあるといえます。2019年冬からのコロナ禍では大きな経済的な混乱が生じ、社会的なシステムの見直しが迫られました。気候変動に伴う自然災害も食料価格や燃料の高騰も、私たちを取り巻く経済や社会が、いかに自然資本、自然の恵みに立脚しているかを知らしめているかのようです。

今、私たちに必要なものは何でしょうか。

自然資源の枯渇、生物多様性の劣化、気候変動などの諸課題に対して、

1. 当事者意識をもつこと。
2. 不具合はあるかもしれないが、良いと思えることを実践してみることに。
3. 科学的なデータをとり検証しながら、試行錯誤をやめないこと。

このようなことが大事ではないかと考えています。

森を再生する会の皆さんにとっては、すでに十分ご理解、実践されている活動だろうと思います。山林での植栽は野生動物との資源の取り合いでもあり、試行錯誤の連続でもありました。20年間継続した植樹活動の実践は、自然資本を守る基本姿勢に他ならないと思います。宮脇昭先生の言葉にもありました。「厳しい環境に耐えて長持ちするものが本物。」まさにゆるぎない本物の活動に取り組んでこられたといえます。

では、これから何が必要でしょうか。

1. 声を発すること
2. 社会機運を高めること

3. 世の中の価値観を変革すること

会の活動をより盛り立てていくためには、情報発信し、協力者を増やすことが重要となります。会の活動や意義について、社会に向けて声を発することが今後も重要と思います。環境問題を口にするのと経済合理性を盾に、何かと反対する人もいるかもしれません。大変勇気のいることだとは思いますが、今、世界で掲げられている目標は自己中心的で不平不満を言うだけの傍観者の多い世界では達成は困難です。自然環境を大切にすることが当然な機運が高まれば、それが価値観となり社会や経済にも波及すると思います。

森を再生する会様の20年の歴史の中では、厳しい局面も多々あったかと思いますが、続けられてきたことに敬意を表すとともに会の文化として今後も受け継いでいただきたいと願います。私共のささやかながら皆様の活動の一助になれば幸いです。

この度はありがとうございました。

エスパックミック株式会社代表取締役社長 吉野知明

令和5年度活動予定

月例活動日：第3土曜日午前8時 J A 安祥支店駐車場集合

5/20, 6/17, 7/15, 8/19, 9/16, 10/21, 11/18

6月11日(日) 里山作り講演会

講師：エスパックミック(株)代表取締役社長 吉野知明

7月23日(日) 自然観察会(設楽町田峰)

講師：エスパックミック(株)代表取締役社長 吉野知明

11月12日(日) 植樹祭(作手高里)

指導：エスパックミック(株)代表取締役社長 吉野知明

1月

20周年記念誌発行

☆令和4年度 NPO森を再生する会へ寄付をいただいた方☆

遠山松枝様(2万円)、山本時恵様(4千円)、石原勝成様(2千円)、

八田健一郎様・大島務様・佐野朋子様(1千円)

※森再生の活動に生かしてまいります。ありがとうございました。

訃報

会員の森田勝己様が逝去されました。会の発展のために御尽力戴きましたことに厚く感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。